

同窓会

ニュース・レター

第14号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2015年3月20日発行



目次

文学研究科長 ごあいさつ	P 2	退職される先生方からのメッセージ	P 6～7
同窓会会長 ごあいさつ	P 2	第6回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座のご案内	P 7
同窓会次期会長 ごあいさつ	P 2	平成26年度第3回就活サポート講座についてのご報告	P 7
特集	P 3	第5回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座についてのご報告	P 7
同窓生からのメッセージ	P 4～5	「教育ゆめ基金」のご報告	P 8
		事務局便り	P 8

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

グローバル化の大波

文学研究科長 和田章男

今、大学は大きく変わることを求められています。そのキーワードは「グローバル化」です。昨年大阪大学はスーパーグローバル大学トップ型に採択されました。留学生の増加、外国人教員の積極的雇用、英語授業や英語による学位コースの設置、入試制度の改革、学事暦の変更、年俸制の導入など、実に多くの改革を実施していくことになりました。

アジア近隣諸国の著しい台頭は、電気業界だけのことではありません。大学で学ぶ学生たちも、英語を始めとする外国語運用能力の高さと旺盛な知識欲をもって、軽々と国境を越えていきます。「内向き」と言われる昨今の日本人学生に、国際的視野、高い外国語能力、異なるものへの理解力を持てる教育がいつそう必要とされています。

文学部・文学研究科では、留学希望の多いイギリスやアイルランドなどの英語圏の名門大学と部局間交流協定を結びうとしています。また、日本語や日本文化を外国の青年たちに教えることも文学部の使命です。アジア、ヨーロッパ、アメリカの日本研究機関と連携して、国際シンポジウムの開催、国際共同研究の推進、そして何よりも留学生の勧誘に努めています。

同窓生の皆様のご支援のおかげで、「教育ゆめ基金」(平成二十五年度より「未来基金」と窓口統合)も大きく成長してきました。今では学部学生の留学支援、大学院生の海外調査補助、留学生支援などに活用して



略歴

1954年生まれ。大阪外国語大学卒。大阪大学文学研究科博士課程単位修得退学。パリ第4大学第3課程博士。専門はフランス文学。1993年文学部に着任。主要業績として、『La création romanesque de Proust: la genèse de « Combray » (Champion, 2012)、一般書として『フランス表象文化史』(大阪大学出版会、2010)など。

います。ちょっとした後押しが、若者たちの大きな飛躍につながります。今後ともいつそのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

退任のあいさつ

同窓会会長 河上誓作

平成二〇年九月十三日、文学部創立六〇周年記念祝賀会に先立つ総会で、石原実前会長から会長を引き継いで以来、この三月で六年半(二期と半年)になりました。そこで会則に基づき審議の結果、四月から現副会長の志水紀代子さんに新会長をお引き受けいただくことになりました。志水さんは的確な判断力と行動力にすぐれた方ですので、文学部同窓会の新しいリーダーとして大いに活躍いただけることと期待しています。新体制への皆様方のご支援・ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

この六年半の間、微力を尽くしてまいりましたが、名簿の発行、総会、懇親会の開催、同窓会講座の実施、「教育ゆめ基金」支援など、大過なく任務を全うできましたのは、副会長の志水さん、柏木隆雄さん、事務局長の入江幸男さん、和田章男さん、村田路人さんをはじめ、事務局・幹事会の皆様方のご支援のおかげです。退任にあたり心から御礼を申し上げます。

グローバル化が進むこの時代、同窓会活動をいかにして充実し活性化するかが大きな課題ですが、文学部同窓会が志水紀代子新会長のもと、時代の流れにふさわしい同窓会として益々発展していく



略歴

文学部卒。文学博士(大阪大学)。阪大助手、九大助教授、阪大教授、阪大文学研究科長を経て、2004年阪大名誉教授、神戸女子大教授。2005年神戸女子大・短大学長。専門は英語学。1996-2000年日本英語学会会長。

ことを祈念して、退任のご挨拶に代えさせていただきます。

新会長就任のあいさつ

同窓会次期会長 志水紀代子

まったく思いがけなく、会長職を引き受けることになりました。河上先生ご夫妻とご縁で、また独立法人化の大きな体制変革の真ただ中で学部長を経験された先生の同窓会への熱い思い入れに魅せられて、乞われるままにお引き受けした副会長職でした。まさか自分がそのあとを引き継ぐことになるとは思わず、正直その重責にまだまだ自信が持てないでいます。

私が入学したのは60年安保の年、入学者六〇余名のうち四年後に卒業したのは全体の四分の三で、残りの四分の一は留年または休学しました。この学年はまた大学に残った仲間が多かったのですが、紆余曲折があった中で、気が付けば私もその一人になっていました。大学で教える機会を与えられ、様々な学生たちに出会う中で、自らを振り返り、その体験を彼らのために役立てることこそが自分の使命であったことを知りました。今回そんな体験が、役に立つのかどうか心許ない限りですが、経験豊かな柏木・大西両副会長、事務局を担って下さる現役の村田先生はじめ諸先生方、幹事のみなさまのお力をお借りして、石原会長、河上会長と引き継がれてきた職責を果たしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



略歴

1940年生まれ。1960年入学、65年大阪大学文学部哲学哲学史第二講座卒業。大阪大学助手を経て、1974年追手門学院大学講師。37年間在職後、2011年より追手門学院大学名誉教授。著書『家族の倫理学』(丸善)ほか。

特集

学校教育とつながる文学部・文学研究科

「大阪大学歴史教育研究会」

～高等学校との連携を目指した取り組み

桃木 至朗

東アジア諸国の歴史認識をめぐる対立や若者の深刻な歴史離れなどが憂慮されるなかで、阪大史学系では、二〇〇五年に設立した大阪大学歴史教育研究会 (<http://www.geocities.jp/rekkyo/>) を中心として、高大連携による総合的・体系的な歴史教育改善の活動が続け、全国の注目を集めています。各地の高校教員など三〇〇〜四〇〇名が参加する月例会を中心に、最新の研究成果を高校教育に反映させられるようにコンパクトにまとめて解説する活動を進める一方で、高校生が世界史・日本史・地理を満遍なく勉強する昔の仕組みの復活は不可能なので、教養課程や社会人講座でまともな歴史を学んだことのない学習者向けの講座の開発を試みています。また大学側の責任として、「古い内容の暗記」ではない教育ができる中学・高校教員の養成、入試の出題や教科書の執筆ができる研究者の養成などを目標に、専門教育や教員養成教育の授業改善を、高校教員の意見を聞きながら進めています。こう



略歴
京都大学卒、大阪外大（ベトナム語・ベトナム文化）、阪大教養部などをへて文学研究科教授。専攻は東洋史学（ベトナムを中心とする東南アジア史、海域アジア史、世界史教育）。主著「中世大越国家の成立と変容」。大阪大学歴史教育研究会代表。

した活動は、全国の高校教員や教員志望の阪大生だけでなく研究者志望の大学院生に強い刺激を与え、先端研究を「タコソボ型」に終わらせずに広く専門外の研究者や市民に開いていく志向をもった若手研究者が、日本史・東洋史・西洋史などの分野を超えて出現しています。これらの取り組みの成果を凝縮したかたちで昨年春に刊行した教養課程用の教科書『市民のための世界史』（大阪大学出版会刊。世界史の本格的学習経験をもたない学生向けの、同名の授業で使用）は、幸い大手新聞などでもつぎつぎ紹介されました。皆さんにもお読みいただければ幸いです。

「歴教研出身」の高校教師として

―歴史学と歴史教育をむすぶ―

矢景 裕子

私は二〇一一年に文学研究科文化動態論専攻共生文明論コースを修了し、その後高校の地歴科教諭として現職に就いています。文化動態論は、「高度職業人の育成」を目的に、二〇〇八年

に新しく開設された専攻で、私はその一期生にあたります。私自身が「高度職業人」たり得ているかどうかはまったくもって怪しいところですが、歴史学の知識を教育現場で役立てたいという思いから、大阪大学歴史教育研究会（以下「歴教研」）の活動に大学院入学以来、参加させていただいております。六年間を思い返せば、私の高校教師としてのキャリアは、歴教研の活動から様々な学びをいただくことで形成されてきました。院生時代には、歴教研を通じて幅広い分野の研究成果に触れ、多くの研究者や高校の先生方と交流させていただくことができました。特に、専門分野の枠を超えた院生グループでの発表は、「広範な研究成果をつなげて分かりやすくまとめる」と

いう授業づくり欠かせないノウハウを学ぶ上で大変有意義でした。歴教研での学びは、高校現場での授業実践に大いに役立っています。授業ごとに明確なテーマ設定をし、語句の羅列にならないコンパクトな説明を心がけ、同時代の世界のつながりを俯瞰する授業を行うためには、より広い視野が欠かせません。まだまだ若輩教師ではありますが、これからも歴教研を学びの舞台として、「ほんとうに面白い授業」づくりに向けて努力しつづけていきたいと思います。



略歴
2011年、文学研究科文化動態論専攻共生文明論コースを修了。兵庫県立水上市高等学校地歴公民科教諭。

同窓生からのメッセージ

今回は広く教育の場に携わる皆様からメッセージをいただきました。

高校の英語教師として

小路山 順史

私は、一九八六年に文学科英文学専攻を卒業して、そのまま高校で英語を教え始めましたから、早いものでかれこれ三十年近く教員をやっていることになりました。何しろ、ずっと十五歳〜十八歳の高校生を相手にほぼ一年中同じようなサイクルで行事をこなし続けていることですから、恥ずかしいのですが、年相応の自覚が少なく、もしかしたら、良く言えば、精神年齢は若いということになるのかもかもしれません。とはいえ、気がつけば、保護者会で、過去の卒業生から声をかけられるということも最近は時々経験します。なので、そういうときは三十年はやはり長い、ということを実感します。

教科の特性上、今でもまだまだ学んでいかないといけないことは日々たくさんあるのですが、学生とは立場が逆転して、

生徒がきちんと理解できるように説明するためには、単に漫然とわかっているだけではだめで、相手の何倍も勉強して理解しておかなければなりません。そこは今でも悪戦苦闘する毎日です。小学校と違って、中学や高校の場合、基本的に専門教科だけを教えますし、どの方も自分が教える教科を得意教科としてきた人が圧倒的に多いので、そこは皆さん悩まれていることではないでしょうか。

最近つくづく思うことは、国語力の重要性です。英語を学ぶに当たっても、国語力はやはり重要だということは日々実感します。英語ではこういう表現をしますよ、となると、文法的にどういう形なのか、などということ、当然理解させ、覚えさせなければいけません。しかしながら、日々言語活動は、洋の東西が変われども、それほど大きく変わるわけではないように思えます。まずきちんとした国語力をつけさせて、自国語で理論的なものを考えさせる習慣を身につけさせること。英語の習得はその後でもかまわないように思うのです。

美術館の教育普及活動に
関わって
鬼本 佳代子

私が教育普及専門学芸員として福岡市美術館で勤務を始めたのは、一九九七年

八月、大阪大学大学院文学研究科の博士前期課程に在籍していたときのことでした。一九九〇年代はちょうど全国の美術館に、教育普及活動がブームとも言うべき勢いで広まり、各館において多様で実験的な試みがなされていました。そのような中、九州初の「教育普及専門学芸員」として博多にやってきたのですが、私が在学中に研究していたのは十五世紀ネーデルラント絵画。当初は「ワークショップ？ 美術館に工房があるのですか？」というありさまで、何をしようのやら、苦難の連続でした。しかし、教育普及活動を切り開いてきた先人たちから学び、自分でも試行錯誤を繰り返すうち、いつの間にかその面白さにとりつかれ、気がつけば二〇年近くが経ってしまいました。

ところで、美術館の教育普及活動といえば、子どものためのものというイメージをもたれる方が多いのではないかと思います。確かに、福岡市美術館でも、多くの他の美術館と同様、夏期休暇期間中に小中学生向けのプログラムを開催し、来館した学校団体の鑑賞サポートを行っています。最近では、未就学児童のためのワークショップも定期的

に実施しています。しかし、仕事の上で最も多くの時間をさいているのはボランティアの育成です。美術館は社会教育機関ですから、私自身は、美術を通して

未就学児童対象のワークショップ「ミニミニワークショップ」のようす



鬼本佳代子 (おにもと・かよこ)
1996年大阪大学文学部美学専攻卒業。
1997年福岡市美術館に教育普及専門学芸員として勤務。1999年、美術館に勤務しながら大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(芸術史専攻)を修了。2008年から2012年まで公益財団法人大原美術館に勤務。2012年より再び福岡市美術館に主任学芸員として勤務。現在にいたる。

市民活動を育てるのが使命の一つだと思っています。ちなみに、昨年から高齢者限定の講座も開催するようになりました。でも、どのようなプログラムでも、終わったときに参加者が、さらさらとした笑顔で帰ってくれると、この仕事をやってよかったです、と思います。

さて、最近の私の最大の関心事はというと、異種館連携です。専門が違う館が連携することで、利用者により多様な学びを提供できる、その可能性を求めて、今後もさまざまな試みを行きたいと思っています。



福岡市植物園との連携活動のようす。植物を描いた屏風作品を鑑賞後、植物園に移動して植物観察をし、その後、拾った葉っぱや枝や木の実を使って屏風をつくるというもの。

文学研究科大学院生糸谷哲郎さんが将棋の「竜王」に

文学研究科で哲学を専攻している糸谷哲郎七段が二〇一四年十二月に行われた第二七期竜王戦七番勝負第五局で森内俊之竜王に勝利し、竜王の座に就きました（昇段規定により八段に昇段）。糸谷さん自身初のタイトル獲得であるとともに、現役学生と同タイトル獲得も初めてのことです。糸谷さんの活躍の様子は全学のニューズレター号外でも特集されました。



(大阪大学 HP より転載)

糸谷哲郎 (いとだに てつろう)
1998年日本将棋連盟・新進棋士奨励会入り。2006年17歳でプロ棋士になる。森信雄門下。06年度新人王戦優勝、新人賞・連勝賞受賞。07年大阪大学文学部入学。11年より同文学研究科在籍。14年竜王戦挑戦権獲得と同時に七段に昇段。同年、竜王位獲得により八段に昇段。

昭和二十九年卒業の西村惇子さんがエッセイを出版されました

始めまして。

私は、一九五四年（昭和二十九年）に文学部社会学科を卒業しました西村惇子です。

振り返りますと、卒業以来もはや六十年余りの時が流れ、最近のスポーツ界でよく言われる legend、

私は（大変おこがましいのですが）まさにそのような存在なのだと思う此頃です。

研究室でお世話になりましたお懐かしい先生方も皆様鬼籍に入られ、多くの友人達も旅立たれて、淋しさが一入深く感じられます。

その様な私が、六十の手習いのつもりで書き始め、書き綴って参りました拙いエッセイのあれこれを、思いがけなくも一昨年未だに、一冊に纏めて出版することが出来ました。

同窓の皆様のご批評眼に耐え得るものかどうか、とても不安なのですが、今回この『ニューズレター』でご紹介下さることになり、嬉しく有難く思っております。

少女時代に先の大戦とその戦後を生きた私は、何よりも先ず平和な日常が営めることの大切さをしみじみ感じます。

一向に終わりのない戦争の渦中に暮らす人々、その日の糧も乏しい貧困に喘ぎながら生きる人々が居ます。でも、その様な暗い混沌とした現状を少しでも平和な世界に変えようと努力している多くの人々が居ます。また先人たちの遺した文学や音楽や絵画などから、どの様な時代にも懸命に生きた人間の姿が伝わってきます。

私はそのような時、人間の素晴らしさに感嘆し励まされるのです。

その想いを私なりに纏めた拙い一冊ですが、その想いが皆様に届けば幸いに存じます。



「昭和」という時代の哀しみと煌めき
過ぎた時、出逢った時……、それぞれに愛した時、
祈りに触れて感じた様々な想いを綴るエッセイ、32編。

同窓会寄付者御芳名 (2013年4月～2015年1月入金分)

五十音順・敬語略

(2013年度) 秋山 肇 安達 俊英 綾 宣雄 栗根 功雄 安藤 加菜子 井内 尚美 石黒 則子 伊地知 仁実 磯島 啓子 磯橋 一恵 井上 俊昭 今井 光規 岩津 洋二 上植 田喜 梅澤 知明 梅原 清広 浦崎 なぎ 遠藤 廣明 大河 原保	澤下 大田 大塚 椏 西大 西大 野篤 一 大野 陸 大森 圭一 小笠原 幹 岡田 祥 奥村 高忠 加地 宏善 金田 善泰 上井 晴美 川原 悌二	子慶 晋之 介之 祐 之 脩 愛 一郎 洋 子 陸 一郎 雄 幹 祥 平 聡 美 恭 江 敬 泰 美 一 悌 二	河村 岸 北村 北村 木村 原 黒羽 高坂 小坂 晋 後藤 林 小里 井 佐藤 藤 佐野 野 沢原 篠 島 島 嶋 谷	和彰 卓 登 雄 純子 象 茂香 稔 晋一 郎 昭夫 子 あい子 明 百合 子 範 明 陸 子 靖 子 秀 子 裕 子 由 子 郁 子	白谷 喜久 末本 杉本 杉本 杉本 宋 曾 高野 竹 田島 多 田中 村 田野 津 團野 井 寺 寺 十倉 刀 富 田 豊 嶋	敦喜 づみ 憲 知 英 和 部 千 鶴 弘 智 子 志 美 典 子 均 均 伸 明 太郎 彦 成 子 貴 子	中川 島 中嶋 中嶋 中原 村 中村 難 波名 服 部 馬 場 林 林 林 東 野 平 岩 平 末 広 福 福 藤	子巖 一 淳 朋 計 子 里 千 聡 淳 圭 一 忍 作 智 子 礼 春 照 彦 静 子 世 正 公 真	藤倉 野 藤野 堀 堀内 前 田 誠 本 本 山下 田 松田 松 三木 宅 井 井 向 向 向 村 本 園 元 廣 森 山 安 河	志織 悦一郎 美和 和 信美 子 陽孝 彦 善宣 子 邦章 太 メノ 子 光 孝 ひろ 文 良 仁 貴 志 敬 敬	山口 山下 山下 吉 吉田 吉 吉田 李 若田 若 田 田 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡 渡	智有 真高 重子 淳子 平美 田 太 弥 子 隆 明 明 義 義 郎 太 夫 知 三 三 方 方 之内 内 明 明 子 子 實 高	(2014年度) 泊謙太郎 北四方三知 竹之内明子 藤田實高
---	---	--	--	---	---	--	---	--	---	--	---	---	--

退職される先生方からのメッセージ

◆感謝のほかは悔いばかり

上倉庸敬

二十六年まえ新米の美学講座助教授に神林教授は担当授業のことを「美学の講義が一つ、内容は自由。外国語講義が一つ、本を目の前に和訳でも講義でも。あと二人で担当する発表演習が大学院一つ、学部も毎週ではないが一つ」と。阪大生の力は十分だからと学部も毎週になった。全教員が指導教員の演習は学生諸君とも教員相互でも楽しく論じ合え掛け替えない時間だった。発表者そっちのけで神林さん大橋さんから教えられたことの数々。力およびぬ様変わりが申し訳ない。最初の授業のテーマは「製作に際し創造神と芸術家の認識がどう違うか」。直後に院生が来て公立校で特定宗教の神を語ってもよいかと詰問した。初々しく若々しい阪大文系！ことし芸術家と作品の関係を直そうと『スンマ』のペルソナを主体に読み替えていたが漸くトバ口、石田教授以来の美学史はプロテイノスに集中しても時間切れ、いずれも例のごとく中途半端で終わり。十五年続けた映画序説・映画研究二コマは充実した卒論修論は得たものの後続に繋げられず。短い文章なら仔細に指導できると大阪日日新聞の畑山代表と語らい院生諸君に十五年間毎週、美術評論を書いて貰ったが書物に纏めてあげられなかった。そんな教師にも優しくかった学生諸君の顔が走馬燈のように巡る。



略歴
1949年横浜市生まれ。京都大学大学院文学研究科で美学美術史学を専攻。単位修得退学のあと神戸学院女子短期大学、大阪樟蔭女子大学を経て文学部に着任。著書『涙の谷を越えて フランス美学』。映画研究誌『FB』同人。

◆豊中キャンパスの思い出

工藤真由美

大阪大学文学研究科には十七年間お世話になりました。家族と離れての単身赴任、しかも大阪にはそれまで全く縁がなかったため大きな不安を抱えての着任でした。決心できたのは、ドイツのチュービンゲン大学に客員教授として滞在中の時、単身赴任中の女性教授と親しくお話をする機会を得て勇気づけられたことが大きかったと思います。初日は、日本語棟の入口が見つけれず、文学部敷地内を三周しました。思い出の一つは、玄関横に明るい教育支援室ができたことです。教員、職員、学生の距離がぐっと縮まってきたのではないのでしょうか。この時の喜びが後にスチューデントコモンズを作る時のエネルギーにもなりました。もう一つの思い出は、大阪外国語大学との統合により、二〇〇八年、三千五百人を超える新入生を豊中キャンパスに迎えた時です。四月三日朝、共通教育の授業登録のため新入生が続々と阪大坂を上ってくるのを見た時は、感動と不安が入り混じった気持ちでした。不安の中で、サイバーメディアセンターのコンピュータがフリーズしてしまい蒼ざめたことも今では懐かしい思い出です。

創造的な教育研究活動や、確実かつ迅速な仕事の進め方に大いに学ばせていただき、充実した日々を送ることができました。女子学生や女性教員が増えてきていることも喜ばしいことと思います。多様な文学研究科の発展を祈念いたします。



略歴
東京大学大学院人文科学研究科単位修得退学。博士（文学）。横浜国立大学を経て1998年より文学研究科教授。著書に『現代日本語ムード・テンズ・アスペクト論』（2014年）他。

◆私の転出メッセージ

森岡裕一

私が文学研究科に赴任したのは阪神・淡路大震災の起こった年だから、ちょうど二十年前のことである。前任校の奈良女子大学には一〇年間在籍したが、その前に言語文化部に四年、文学部の助手も一年勤めたので、阪大での教員生活は計二十五年にのぼる。民間企業でのサラリーマン生活もくわえ社会人として過ごした四〇年間の六割は阪大での生活である。長くもあり短かくもあった。阪大を去るにあたり総括するなら、文学研究科生活はかなり充実していたのではないかと、というのが正直な感想だ。もともと、研究科への貢献とか学問面で著しい働きができたかというところは忸怩たるものがある。それはこの際わきへ置き勝手な印象を言うならば、文学研究科の日々は居心地がよく張り合いがあったと思う。ひとつには、この職場はだれもがみな忙しく立ち働いて、できるだけ効率よく職場を動かそうという意欲が漲っていて、その意味でストレスを感じることが少なかった。また、大阪大学というだけで世間の注目度がそれなりに高いことも、ときにプレッシャーにはなるが、自然に自己研鑽する結果、成果が生まれ意図せず生産性の向上がはかられるというメリットもあった。四月から私学で働くことになっており、違う環境でどんな仕事ができるか楽しみである。文学研究科での経験がそこで活かされればそれ以上の幸せはない。



略歴
1950年生まれ。大阪外国語大学卒。大阪大学文学研究科博士前期課程修了。文学博士。アメリカ文学専攻。単著：『アメリカ文化のサブリメント』（2014）『飲酒/禁酒の物語学』（2005）、編著：『西洋文学』（2011）、共編著：『依存する英米文学』（2008）『新世紀アメリカ文学史』（2007）『シャーウッド・アンダーソンの文学』（1999）、翻訳：アーサー『酒場の十夜』（2006）。

◆待兼山の日々

平 雅行

待兼山の生活が間もなく終わりを迎えます。伝統と権威ある阪大日本史を、新しい世代に無事引き継ぐことが出来る、まずはホッとしています。

私は一九八九年に着任しましたが、九四年に脇田修・長山泰孝先生が退官され、四十二歳の若さで研究室の最古参となりました。折しも教養部の解体と分属（九四年）、文学部の改組と実験講座化（九五年）、大学院重点化（九八年）など組織改編が相次ぎました。特に最初の数年は、ほとんど孤軍奮闘の状態でしたので、激動の時代を無事に乗り切ることができたことが、まずは嬉しい。

研究室では、学ぶ楽しさと厳しさの両立を第一に考えました。和気あいあいとしたなかやかさの中に、ピンと張り詰めた厳しさがある、それが私の理想とする研究室です。

二年ほど前でしたか、『文学部紹介』に学生アンケートが掲載されました。そこでは、勉強が一番大変そうな研究室として、また学生たちの仲が一番良さそうな研究室として、日本史の名が挙がっていました。それを見た時、私は自分の想いが実現した喜びを覚えるとともに、大阪大学を去る時がやってきたと感じました。やるべき事をやり終えた、その達成感から、私はもう一度チャレンジすることを決意し、早めの停年を選びました。

多くの方に支えられた二十六年でした。同僚の先生方、職員の方々、そして学生・院生の皆さん、本当にお世話になりました。今はもう感謝、感謝です。



略歴
京都大学博士課程修了。京都大学・関西大学を経て1989年に阪大文学部助教授。96年同教授。著書に『日本中世の社会と仏教』（塙書房）、『親鸞とその時代』（法蔵館）など。停年後は京都学園大で教鞭をとる予定。

第6回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座のご案内



新緑の平城宮跡を歩く

およそ1300年前、奈良盆地の北側に巨大な都、平城京(710-784)がつけられました。平城京の北端には、天皇の住まいや官公庁が集まっていた平城宮がありました。最新の研究成果を踏まえた解説を交えながら、皆様と一緒に平城宮跡を歩き、奈良時代に思いを馳せてみたいと思います。

- 日 時 2015年5月9日(土)
- 場 所 平城宮跡資料館前(近鉄大和西大寺駅徒歩10分) 12:30集合

※受付は12時より/昼食をお済ませください/雨天決行

【第1部】12:30~14:45

平城宮跡資料館、第一次大極殿、朱雀門、平城京歴史館の見学

※第1部のみの参加者は平城京歴史館で解散

【第2部】15:00~18:00

式部省跡、東院庭園、遺構展示館、宮内省跡、内裏跡、第二次大極殿などの見学

※平城京歴史館を15時に出発/途中離脱可

- 講 師 市 大樹(大阪大学大学院文学研究科准教授)

●お申し込み方法

氏名、卒業(修了)年次、専攻を明記の上、メールまたはハガキで下記連絡先までお申し込みください。締め切りは4月30日(木)です。応募多数の場合は先着順とさせていただきます。

メール: dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

住所: 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会宛

第5回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座についてのご報告



能衣装の試着体験をする同窓生

平成二六年五月(〇日)に大阪市阿倍野区文の里の井戸能舞台において、第五回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座「能楽体験講座」を開催し、一九名の方が参加されました。

まず、本学演劇学准教授・中尾薫先生による能楽の歴史に関するミニレクチャーがありました。

続いて能衣装や能面の実物を見せていただきながら、観世流シテ方の井戸良祐氏に解説を加えていただきました。

今回の講座も幅広い世代の同窓生にご参加いただき、充実したものになりました。

平成二六年十二月二十七日(木)に、文学部(担当教育支援室)と本会の共催による平成二六年度大阪大学文学部第三回就活サポート講座が開催され、約五十名の学生が参加しました。

前半は「文系学生が年内にすべきこと―自己分析・ES作成のポイント&秋冬インターンシップ最新情報―」と題して、株式会社マイナビの土山勇氏を講師にお迎えし、解禁日が後倒しになった今年度の就職活動のスケジュールのポイントをお話いただきました。

後半は学校教員、公務員、民間企業に内定した学生五名に就職活動体験談を語っていただきました。

今後とも本会では、文学部の就職支援活動に積極的に協力していく予定です。皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成二六年度第三回就活サポート講座についてのご報告

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄附いただければ幸いです

文学部創立60周年（平成20年）の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。平成25年秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様より、平成26年度総計130万円ほどのご寄附をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。
（文学研究科長 和田章男）

平成26年3月～平成27年1月「教育ゆめ基金」寄附者リスト（敬称略・五十音順）

浅野 敬一	宇野 康司	門林理恵子	柴田 令子	田中 美齋	平岩 静	山下亜有実
天野 一平	浦野 朋子	金谷 亜希	澁市かおり	團野 典子	平田 雅子	山田二三夫
栗根 功雄	江川 温	上山 泰	末本喜久次	徳富 博幸	福本 治	山戸 暁子
飯田 朋子	遠藤 廣明	川瀬 正裕	杉 順子	富田真理子	藤岡 穰	山根 紀子
池田 美芽	大浦 典正	菊川真紀子	杉本 敦子	中野 岳	堀江 明博	由本 陽子
石原 実	大倉美恵子	木谷 道隆	鈴木 元子	永野 仁	本多 隆成	和田 章男
磯島 啓子	大坪 照行	北村 登	千貫 菊子	中道 典子	益田 美子	
井上 一成	大村 睦子	久保田泰宏	高見 寛信	中村 清志	松田 順子	
今 沢 達	荻原 淳	熊田 亮順	武田 章	仁木 崇	三輪 博志	
岩倉 國浩	奥村 忠男	斎藤芙美子	竹田 順子	西村 惇子	向井 梨夫	
岩佐 浩之	加地 宏江	佐々木義通	田島 智子	服部 敬	武藤奈緒美	
上江洲律子	加藤 洋介	四方三知夫	巽 三郎	日野林俊彦	藪本 和法	

◆「教育ゆめ基金」の支出（平成26年度）

- ・文学部海外留学支援制度奨学金（2名分）：240,000円
（平成26年度1月末現在の残額：5,945,509円）



事務局便り

お知らせ

◇「文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿」（二〇二二年版）について

二〇二二年三月刊行の「大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿」をご購入を随時承っております。販売価格（五千元）＋送料（百六十円）でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、新規に同窓会終身会費（二万円）をお支払いいただいた方のうち、希望される方に冊呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。

◇同窓会へのご寄付について

同窓会では、寄付金（二千元）を受け付けております。昨年度今年度と、たくさんの方に支援を賜りました。五頁に「ご寄付をいただいた皆様の御芳名を記載しております。誠にありがとうございます。引き続きご支援をお願い申し上げます。

「名簿購入代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付」

口座番号 009401179043

加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

◆お願い

◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

◆大阪大学文学部・文学研究科同窓会

◆会長：河上誓作（S四〇卒）※H二六年度末まで

◆副会長：志水紀代子（S四〇卒）※H二七年度より会長、柏木隆雄（S

四四卒）、大西愛（S四〇卒）※H二七年度より

◆事務局メンバー

事務局長：村田路人（S五二卒）

総務：岡田 禎之（S六二卒）、高木千恵（H一〇卒）

会計：西田 有利子

企画：市大樹（H七卒）、中尾薫（H一五修）

広報：岡田裕成（S六一卒）、舟場保之（S六一卒）

事務局補佐：福村一弥（H二五卒）※H二七年度より宮川真弥（H二二修）

事務局補佐（Web担当）：鈴木寛和（H二六卒）

●住所：〒500-8103 豊中市待兼山町一番五号

●ホームページアドレス：http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/

●事務局メールアドレス：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp